



教会創立71周年によせて

【私たちに委ねられたこと】

Iテサロニケ2：1～12

横浜キリスト福音教会 慶徳正好

はじめに

私たちの横浜キリスト福音教会は、創立71周年を迎えました。1955年（昭和30年）当時、外国船が出入りする横浜港を見下ろすこの地に「センド国際宣教団本部」が建てられ「白幡山聖書研究会」（当初の名称）が産声をあげました。宣教を開始したスイート宣教師は、遡ること10年前、終戦の1945年、焼け野原と化した関内にある当時、接収されていた「横浜海岸教会」で従軍牧師として福音を熱く語りました。記録に残るスイート師の言葉に、『今、大きな責任と前代未聞のチャンスを私たちは目の前にしています。やらなければならないビジョンを神がくださるように。（心の）ドアは開かれています。人々には霊的な渇きがある、今、小さな火花でも力強い火となるのです』とあります。

（センド国際宣教団「主の真実～G Iから70年」2015年より引用）

一度帰国したスイート師は1947年アメリカのデンバーで、極東福音十字軍（現センド国際宣教団）を組織して、再び日本への宣教を志し横浜に戻ってきました。そして、本部（今の教会隣接地）で宣教師派遣の責任を委ねられたのです。こうして福音を委ねられ宣教団本部の片隅で始まった私たちの教会は、その後、白幡西町の小さな会堂から、現敷地に旧神学校の寮（古材）を再利用した会堂を経て、1994年今の会堂が建て上げられました。このように71年前から、アメリカの宣教師によって、日本人牧師によって、そして教会に集う兄弟姉妹によって、神の福音は伝えられてきました。かつて、使徒パウロに委ねられた神の福音がテサロニケ教会を通して、どのように伝わっていったのか、聖書に目を向けます。

◆委ねられた福音は大胆に語られた・・・ 1、2節

新改訳第3版では、「激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました」とあります。パウロは激しい苦闘の中でも（新改訳2017では「激しい苦闘のうち」）、神の福音を大胆に語ったのです。この時の「苦闘」とは、どのようなものだったのでしょうか。2節、「私たち（パウロたち）は先にピリピで苦しみにあい、辱めを受けていた」とあります。激しい苦闘とは、ピリピでのことでした。一行はマケドニアの植民都市ピリピに数日間滞在して、あの紫布商人リディアとその家族が救い主を受け入れました。この時、占いの霊につかれた女奴隷から悪霊を追い出したことにより、彼女の主人たちに金儲けの望みがなくなったことで、パウロ一行は恨みを買いました。町の長官の前に引き出されたパウロとシラスは、群衆の反対もあり、衣を剥ぎ取られ、むちで打たれ、牢に監禁されました。しかし、真夜中、神は地震を起こされ、牢の扉が開け放たれ、囚人の鎖が外され、その時、自殺を図ろうとした看守の命までも守られたのです。その結果、神は看守とその家族までも救われたのでした。パウロはこの時の出来事を思い起こしながら、ピリピで苦しみにあい、辱めを受け、激しい苦闘の中でさえ、神の福音を語ることができた。だから、宣教は《神のために、神に向かって、神とともに》推し進められたのであって、宣教は決して「無駄に」ならなかったのだ（Iテサロニケ2：1）と振り返ったのです。このように、ピリピでの様々な苦闘は、彼らが信じる神によって「勇気づけられ」、肉体的にも、精神的にも乗り越えさせていただき、委ねられた福音は大胆に語られたのでした。

◆福音は神に認められ委ねられた・・・ 3～6節

4節でパウロは、「私たちは、神に認められて福音を委ねられた者です」と語りました。神の福音、それは神によって認められない限り福音であるはずはない、私はこの福音を委ねられた者だと語ったのです。そし

て、委ねられた福音は、神の《絶対的権威》によって与えられたことを、続く3～6節では否定形を6つ挙げて説明します。3節〈誤りから出ていない〉〈不純な心から出ていない〉〈だましごとでない〉、5節〈へつらいのことは用いない〉〈食りの口実を設けない〉、6節〈人からの榮譽は求めない〉と繰り返し他の教えと違う《神に委ねられた福音》の純粋性を説き明かします。委ねられた福音の教えは、悪人や詐欺師のような誤った教えとは違う、不純な動機から出ているものではない。私たちは〈だましごと〉で回心者を得ようとしたのでもない。〈へつらいのことは〉で人に気に入られるようご機嫌取りをしたのでもない。動機を隠すため〈食りの口実〉を設けたのでもない。さらに、私たちは、だれからも〈人からの榮譽～良い評判を得ること～〉は決して求めてこなかった、と証言したのです。こうして、福音を委ねられたパウロは、4節「人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただくとして」、語ったのでした。パウロは委ねられた福音を、人にではなく神に喜んでいただくとしている心の内を、ガラテヤ1：10で語ります。「今、私は人々に取り入ろうとしているのでしょうか。神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人々を喜ばせようと努めているのでしょうか。もし今なお人々を喜ばせようとしているのなら、私はキリストのしもべではありません」と、自問自答するように語っています。福音を委ねられた者は、委ねられた者に「ふさわしく」、正しい動機と正しい方法で伝えることが求められています。なぜなら、神ご自身が、4節「私たちの心をお調べになる」のですから。

◆委ねられた福音を〈母のように、父のように〉伝えていく・・・7～12節

パウロは、7節で、「私たちは、自分の子どもたちを養い育てる母親のように」、11節で、「私たちは自分の子どもに向かう父親のように」、と神の福音の伝え方を語っていきます。使徒であるパウロたちは、《使徒としての権威》をあえて主張することなく、母親がわが子をいとおしく養い育てるように、テサロニケ教会にキリストの愛をもって接しています。9節に、テサロニケ教会を愛するがゆえ、「(教会に) 負担かけないように、夜も昼も働きながら、神の福音を宣べ伝えた」と、あります。彼らは「敬虔に、正しく、また責められるところがないように(10節)」ふるまったのです。「敬虔に」とは神に対する責任を、「正しく」とは人に対する責任を、「責められるところがない」とは、人から非難を受けることがないふるまい方を言います。さらに、福音を伝える時のふるまい方について、10節、「あなたがた(テサロニケ教会)が証人であり、神もまた証人です」と、パウロは告白しました。

そして、11、12節、「父親のように、あなたがた一人ひとりに、ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩むよう」、《勧め、励まし、厳かに命じて》いるのです。「召してくださる神」とは、今、あなた方を神の国へと召して呼び寄せてくださった真の神に他なりません。その神にあって父親が子どもに教え諭すように、パウロは「厳かに命じ」ているのです。

終わりに

では、【私たちに委ねられたこと】とは何でしょう。かつて、パウロに、テサロニケ教会に《委ねられた福音》は今、宣教師や歴代牧師を通して、私たち横浜教会に委ねられています。71年間絶えることなく。勿論、福音宣教には順調な時もあり、逆境の時もありました。最近で言えば、コロナの時、会堂には説教者と数名の奉仕者しか集まれませんでした。しかし、神のことは確実に伝えられ続けました。私たちはこの神の福音に生きるよう〈みことばに聴き、みことばに従い続けましょう〉。兄弟姉妹たちの現状を知りながら、共に祈り分かち合いましょ。それが、今、私たちに委ねられていることなのですから。

Iテサロニケ2：13、「こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことは受けたとき、それを人間のことはとしてではなく、事実そのとおり神のことはとして受け入れてくれたからです。この神のことは、信じているあなたがたのうちに働いています。」神のことはによる《信仰によるさらなる一致》を私たちは求められています。これが私たちに委ねられたことだからです。

(5月3日 主日礼拝説教原稿の要約を掲載しました)

NHK 朝のドラマ

近代看護の先駆者 大関 和^(ちか)の故郷をたずねて

・・・大関和を支えた信仰者たち・・・



大関 和とは・・・1858(安政5)年～1932(昭和7)年

〔晩年の和と記念碑・武家屋敷が並んでいた街道〕

和は幕末1858年、下野国那須郡黒羽藩(栃木県大田原市)、家老の大関弾右衛門増虎(だんえもんすけとら)の家に生まれました。激しく移り変わる時代の中で、和は成長し1881(明治14)年頃上京します。そこで、キリスト教と出会って洗礼を受けたことは、彼女の生き方や看護観を形成する大きな転機となりました。正規に訓練されたトレインドナースとして、また信仰者として、和はどのように歩んだのでしょうか。和を支えたキリスト者を紹介しながら、現地を歩きながら見えてきた彼女の信仰、その生き方に迫っていきます。



〈結婚・離婚そして東京に 看護の道へ〉

18歳の頃、和は同じ黒羽藩元藩士、維新後は陸軍少尉まで務めた渡辺福之進豊綱と結婚。のちに長男六郎、長女シンを授かるが、40歳を越えていた豊綱との結婚生活は長く続かず離婚します。〈豊綱は以前から複数の妾や子どももいたようで、長男は「六郎」と名付けられています〉1881(明治14)年、23歳で亡き父の知人を頼り、母と子どもを伴って上京。実業家「鄭(てい)永慶」、歯科医の妻「イーストレーキ夫人」、植村正久実弟で英語塾を営む「植村正度(まさのり)」らとの交流が始まります。離婚して気持ちが塞いでいた和に、鄭はイーストレーキ夫人を紹介。通訳を介さず夫人から英会話を学びます。

塾経営者の正度は、和の人生を大きく変えることとなる植村正久(当時、下谷一致教会牧師)の弟でした。イーストレーキ夫人の家庭集会で植村は聖書を語りました。和は『植村先生の熱心さに私も心動かされました。というのは、伝道師となって神のみ栄えを伝えるのも、看護婦となって神の恵みを伝えるのも、同じ天の使命ではないか。口で伝えるのと手で行うのと、何れが貴く、何れが卑しいか。全く差別はないはずであると、考えたのでありました』と、振り返っています。(婦人界二巻四号)



※注；「看護婦」の名称は当時のままの表現としています。

しかし当時、賤業と言われた「看病婦」は、金を稼ぐのため危険で汚い仕事をする人、あるいは遊郭などを営んでいた人が携わっていたことで世間から蔑まれる仕事でした。和は「いかに落ちぶれても、看病婦のような仕事には就かない」と、始めは自分のプライドを傷つけられた思いだったようです。植村牧師は前述の言葉と有名なナイチンゲールの例を挙げて、日本の看護の遅れやその必要性を和に語ったのでした。和は神から与えられた使命として受け止め、忌み嫌われていた看護婦の仕事に就くことになったのでした。

1886(明治19)年11月、28歳で桜井女学校附属看護婦養成所(以下、養成所)に入学。翌1887年3月、和は番町教会(後の一番町教会、現日本基督教団富士見町教会)で植村牧師より洗礼を受けました。

※注；受洗した「番町教会」は当時麹町区一番町(現千代田区三番町)にあった借家

〔和が植村より受洗したのは番町教会
画像はその少し後の一番町教会〕

〔若き日の植村正久〕



彼女はこれまでの罪を悔い改めて神に従っていくこと、看護の仕事は神から与えられた天職として全うすることを誓いました。和の生涯に絶大な影響を与えたもう一人の人物をあげるなら、苦勞して養成所を立ち上げたマリア・ツルー宣教師です。彼女は女子教育や慈善事業は全てを宣教師が取り仕切るのではなく、道を備えた後は、日本人の手に委ねて祈り、見守るという考えでした。横浜で共に働いた宣教師リディア・E・バラ(J・C・バラの妻)は、肺炎に罹り苦しんだ経験から、日本にも正式な看護婦が必要だと痛感しました。帰国後アメリカでも養成所の必要を訴えている最中に急死。その遺志を受け継いだのがツルーでした。アメリカで資金を募り、宣教団体に許可を取り付けました。様々な困難を乗り越えようやく開所にこぎつけたのが桜井養成所だったのです。ツルーは強烈な個性と幾多の苦勞を重ねてきた矢嶋楫(か)子と出会い、彼女を初代桜井女学校の校長に任命しました。この矢嶋は、一夫一婦制や公娼制度廃止などキリスト教精神に立って女性の人権を守る運動でも、和に多大な影響を与えた人物です。和は養成所時代について、「聖書の講義は、矢嶋校長から伺いました」と、後に語っています。

〔養成所一期生、前列右が和〕 女子学院所蔵



ちなみに、この頃設立された看護婦養成所は、「有志共立東京病院(後の慈恵病院看護婦教育所)」が1885年のこと、「京都看病婦学校(新島襄と宣教医ベリーによる)」が1886年でした。実は、有志共立病院設立に関わった人物に《鹿鳴館の華といわれた大山捨松》がいます。捨松は看護の尊さを説き、日本初の慈善バザーの収益(今の約1億円相当)を病院設立のため寄付したと伝えられます。現在、那須塩原市には「大山記念館～別邸(那須拓陽高校敷地内)」が保存されています。想像の域を出ませんが、和と捨松がどこかで出会っていた可能性もあるかもしれません。 ※注；大山別邸見学是那須拓陽高校で、事前受付が必要

〔看護の必要を説いた捨松〕



〈帝大病院から新潟県高田へ、再び東京で看護に突き進む和〉

1888(明治21)年10月、31歳となった和は研修終了。帝国大学医科第一医院の外科看護婦長に就任、勤務2年間、厳しい医療現場や非情で知識のない病院の実態を見て「肝もつぶれるほど」過酷な問題に突き当たったのでした。(同期の鈴木雅は医科第一医院の内科看護婦長に就任) 自己犠牲とキリストの慈愛による細やかな看護と卓越した医療知識で、医師や看護婦、患者たちから慕われたのでした。

〔アグネス・ヴェツチ、左に鈴木雅、右に大関和〕



和のいくつかのエピソードを紹介します。

《初めての担当患者》「・・・私が大学の実地を終えて何日も経たない間に、私はその頃、最も重症患者という・・・13歳ばかりの女の子に付添いました。

その子は腎臓、心臓、腹膜炎の三症を併発していたので非常な重患でありました。・・・どうにかして癒したいものと思ひまして、15日間というものは一睡もせずに、日に何度となく神に祈りを捧げて心の底からこの人の平癒(へいゆ)を願ったのです。・・・私は夜中に5度も6度も大便の世話から、氷嚢(ひょうのう)の取り替えに手を尽くしましたので、手馴れぬ仕事に随分疲れ切りました。が、この患者は私の祈りが神様に通じてか、だんだんと快方に向かって行って、やがていく月も経たず退院されました。その時の嬉しさは未だに忘れません。」(婦人界 二巻四号「私が看護婦になった当時」) ※注；「平癒」は病氣やけががすっかり治って健康な状態に戻ることを。

《神の愛に全身を捧げる》「私たち人間は、神によって造られました。これは造り主なる神の有難い嬉しい愛と恵みを思う時、どうして空しくこれを受けておられましょ。どうぞ神のご恩の万分の一でも、報いたい

と思いましたが、父なる神は霊でありますから、ただその戒めを守って、私たちの隣人を愛さなければなりません。」（女子文壇 第七年第七号）

「外科室に入りますと、私の心は祈りと涙に充ちました。・・・乳がんの患者は、包帯を巻かれる痛さに、ご飯もろくろく食べられないと泣いておりました。その時にも、ああ包帯を巻くことさえも、愛の心を用いてするのと、しないとでは、患者にとってどれ程の違いだろうかと考えてしまいました。今、私自身が教える看護の仕事とは、何より先きにこういう精神の教育から始めたいと思っています。」

（女子文壇 七巻七号「神の愛に全身を捧げた」） ※記録に残る大関和の言葉は、編集者が現代風に改めています。

〈新たな使命に向かって～看護婦養成所～〉

和の残した言葉に目を向けていきます。『看護婦派出心得』初版の結びに、「今の世の人、看護の基礎、位置づけ、事業の大切さは何かを知りません。私は看護を天職とする心構えが大切と考えます。看護に当たる皆さん。私の姉妹よ。私たち人間の魂はどこから来て、どこに帰るのでしょうか。また、私たち人間は何のために世に生まれたのでしょうか。このことを深く考え、真理はどこにあるかを追い求めなければなりません。私自身、看護を一生の天職として全うし、やがて限りのある肉体より霊が離れる時、永遠で限らない天の御国に上げられるよう希望します。ああ神様。この罪深き世を救ってください。私たちに天職とは何かを教えてください。その委ねられたことに堪える力を与えてください。私の本分である看護を全うすることができますように。どうぞ祝福を与えてください。」

また、『実地看護法』第三版序文に、「ああ、神は遂にわが子（長男、六郎）を召された。・・・私の半生にわたる看護の務めは、彼によって志し、彼によって励まされ、私の片身であれば、ここに記して、彼を覚えて祈りとしたい。短歌《御園生（みそのう）に 生いし撫子（なでしこ） 栄ゆとも 枯るも ただに神のますます》～園に生えた撫子が美しく咲くのも枯れてしまうのも、ただそれは神の恵みによるのです～

〈晩年になって 主に仕えるために「東京神学社」へ〉

1910(明治43)年2月、52歳になった和は東京神学社（植村正久が創設）「婦人科」に入学。神学校で学ぶことは若いころからの念願でした。「婦人科」は女性伝道師を養成する専門機関で、植村の意向により女性伝道師だけでなく、看護婦教育の目的も含んでいました。これまで、ツルーや和が語っていたキリストの慈愛を持って看護に当たる女性の必要を感じていたからです。和は自ら、数年前に九死に一生を得た大病から守られた身でした。「私は偉大なる恵みを神から受けました。ですから、今、感謝の想いを持って残された人生を神に捧げたいと決めたのです。」（「婦人新報」第159号）の志から「婦人科」で聖書の学びを始めたのでした。

キリストのことば、『すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。』（マタイ11：28～30「婦人新報」第152号「心の花」より※原文は旧文語体）和はこの恵みと平安の福音をもって、終生、聖書に生かされ、聖書に生き続けたと言えるでしょう。

大関 和 略年譜 （32歳以後）

- 1890(23)年、32歳 第一医院で建議書を提出。10月に帝大を辞職。年末に新潟高田に女子校寮監兼伝道師として赴任。
- 1891(24)年、33歳 高田で廃娼・矯風活動を展開。知命堂病院看護婦長に就任。
- 1894(27)年、36歳 産婆看護婦養成所を開設。講師も兼務。
- 1896(29)年、38歳 ツルー看護のため帰京。秋に東京看護婦会講習所講師に就任。
- 1898(31)年、40歳 埼玉の集団赤痢対応で功績を上げる。
- 1899(32)年、41歳 『看護婦派出心得』出版。大日本看護婦人矯風会設立。同機関紙創刊。
- 1900(33)年、42歳 東京看護婦会の経営を鈴木雅より引継。
- 1908(41)年、50歳 那須で病氣療養中『実地看護法』出版。
- 1909(42)年、51歳 大関看護婦会設立。
- 1910(43)年、52歳 東京神学社（現東京神学大学）に入学。
長男の六郎、東南アジアで客死。（享年33歳）
・・・43～48歳頃 看護婦人矯風関係で奔走・・・
- 1917(06)年、59歳 東京看護婦学校設立。
・・・1932(昭和7)年、74歳で死去。富士見町教会で葬儀。

※（ ）内は元号；明治及び大正を示す。

〈大関 和を支えた信仰者たち〉

○桜井ちか(1855-1928)；女子学院の前身、桜井女学校の創始者。鈴木雅とは横浜共立学園(当時は横浜ミッションホーム)時代の友人。

○マリア・ツルー(1840-1895)；桜井女学校の宣教師。看護教育や信仰面で、大きな影響を和に与えた人物の一人。

○矢嶋楯子(1833-1925)；女子教育者、社会事業家、キリスト教婦人矯風会創設。桜井女学校校長。和たちに聖書を教えた。和は生涯を通じて楯子と共に矯風会の活動に熱心に取り組んだ。

○アグネス・ヴェツチ(1842-1942)；イギリスエジンバラ王立病院看護学校卒。和たちに〈ナイチンゲール式看護法〉を教えた人物。

○広瀬うめ(1868-1959)；看護婦を志願し岡山から上京。卒業後は矯風会活動に携わる。

○桜川里以(りい 1868-1959)；帝国大学医科第一医院で内科看護婦長を務めた後、キリスト教系の病院で勤務。夫に先立たれた後は大関看護婦会の一員となる。

○鈴木雅(1857-1940)；東京看護婦会創設者。在学中に横浜海岸教会で受洗。和の良き相談相手であり、相棒的存在。朝ドラでも、ダブル・ヒロインとして登場する。

○植村正久(1858-1925)；富士見町教会牧師。看護とは伝道に通じる崇高な職と説き、和を看護への道へと導いた人物。日本キリスト教会の形成に大きな役割を果たした人物。植村の神学の特徴は、「福音主義の信仰」と言われる。

○植村季野(1858-1930)；植村正久の妻。植村の教えに感動した和が「弟子になりたい」と訴えた時「先ず神を信じるのが先」と諭し、和が熱心に求道するきっかけを作った。

○相馬黒光(1876-1955)；夫の愛蔵と共に東京中村屋を創業。愛蔵は帝大病院時代の患者として和と知り合い、支援。晩年は夫婦でよく和を見舞った。



左から ○ 桜井ちか ○ マリア・ツルー ○ 矢嶋楯子



○アグネス・ヴェツチ(中央)と桜井女学校附属看護婦養成所第一期生
1888(明治21)年 医療法人知命堂病院蔵



晩年の植村夫妻

中村屋創業者 相馬夫妻



参考文献・・・「和と旅する」「百万人の福音 905 号」(共にことば社)

図録「近代看護の先駆者・明治のナイチンゲール 大関和」

那須与一記念館及び黒羽芭蕉の館 企画展

「植村正久と其の時代 第三巻」(教文館) その他、黒羽まち巡りマップなど

日本福音キリスト教会連合 横浜キリスト福音教会 併設 聖書教育センター
〒221-0065 横浜市神奈川区白楽 110 電話：045-432-0507 慶徳正好